SHONAN VISION

Social Magazine

Vol.10

2018.06

Take Free

明るく楽しく、海をキレイに！

明るく楽しく、海をキレイに！
― NPO法人「海さくら」代表・古澤純一郎

文・森 休八郎　　写真・上重泰秀

夕方。太陽は、その光を海面一杯にばらまきながら、海の向こうへと沈んでゆく。キラキラと乱反射する無数の輝きは、まるで桜の花びらを散らしたようだ――古澤純一郎はこれを"海さくら"と呼び、「目指せ！　日本一楽しいゴミ拾い」を掲げて自らが設立したNPO法人に、そう命名した。そこには、陽の輝きが足元の波打ち際まで届くようなきれいな海にしたい、という熱い思いが込められている。

たったひとりで始めたビーチクリーンを、全国レベルのイベントにまで大きくしていったその熱量は、いったいどこから来るのか。その熱源に迫った。

船具屋の4代目に生まれて

古澤は1975年10月、東京に生まれた。

「家業は、明治40（1907）年創業の船具屋で、ぼくはその4代目になります。最初は江戸新川で営んでいました」

江戸時代以降、江戸の流通を担っていたのは水運だった。大川（隅田川）や荒川、江戸川といった河川を中心に、縦横に掘られた運河を利用して、さまざまな荷物が運ばれた。かつて日本橋に魚河岸があったのも、水運ゆえだった。

「2代目になると、川を上り下りする砂利運搬船の船具を売っていたのですが、道路網の発達で水運は次第に衰えていきます。うちも時代の流れに合わせて、プレジャーボート用の船具を扱うようになっていきました」

顧客は東京港から相模湾、駿河湾へと広がっていった。

「小さい頃、会社に遊びに行くと車の助手席に乗せられて納品に付き合ったりしましたし、ヨットのイベントなどにも連れて行ってもらいました。叔父さんがボート作りの職人で、その作業を見ていたりしたこともありました」

海とのかかわりはそれだけではなかった。家族でよく江

の島に遊びに行ったことを、よく覚えている。
「子供の時は、暴走族がいっぱいいたりして、江の島は怖いところだ、という印象があったんですよ。海も今ほどきれいじゃなかった。でも、だんだんと江の島が好きになっていきました」
　小学校から大学まで慶應義塾に通った古澤は、中学・高校を横浜・日吉で過ごしている。海に遊びに行くなら、湘南がもっとも手っ取り早かった。
「サザンオールスターズや加山雄三、TUBEで湘南には憧れていましたね。だからもう何かあると江の島。街よりは静かなところが好きなので、彼女とのデートも江の島。月に数回、季節関係なく通っていました。とにかく江の島の海も、風景も大好きなんです」
　でも、不思議とマリンスポーツには手を出さなかった。サーフィンもダイビングもかじった程度で、大学では体育会庭球部に所属し、テニスで日本一になることを目指したほどである。
「そんなにうまくいくわけもなく、ボールボーイで終わりましたけど、これはぼくの大きな財産になっています」

営業マンとして東奔西走

　慶應義塾大学法学部政治学科を卒業後、横浜そごうに入社する。配属されたのは美術部だった。
「外販といって、絵画や焼きものといった美術品をお客さまにお持ちして販売する、という仕事です」
　担当は偶然にも、逗子や茅ヶ崎などの湘南地域。
「美術品の知識がゼロなので、力勝負でしたね。いろんな種類の絵を持ち込んで、お客さまの好みがある程度わかったら、今度はそこに絞り込んで持って行き、お買いいただくという感じでした」
　就職前、3代目の父とこんな約束を交わしていた。丸3年は他でしっかり働け――。そして古澤は、そごうを丸3年勤め上げて退職する。が、家業には戻らなかった。
「いずれ古沢工業に戻るのならば、中小企業でも働いたほうがいいだろう、と思ったんです。ぼくはもともと広告代理店に行きたかったんですが、新卒のときは叶わなかった。ところがちょうどその頃、ぼくが面接を受けた会社の社長さんからお誘いを受けたので、今度はそこにお世話になることにしました」
　入社したのは、広告やマーケティングが専門の東成社。古澤はここでも敏腕営業マンとして大活躍した。
「とにかく働きました。当時は売り上げよりも粗利を求める時代。大好きな仕事だったし、とにかく熱く仕事して、いっぱい稼がせてもらいました」
　その間も、江の島には熱心に通った。テニスの試合に負けても、デートも、失恋も、プロポーズも、すべての舞台が江の島だった。古澤にとって江の島は、東京でのハードな生活から逃避できる、オアシスのようなものだったはずだ。
　転機は2004年に訪れた。父が体調を崩したのだ。東成社での仕事もそろそろ丸5年になる。そろそろ家業に戻る潮時、と感じた古澤は、家業の古沢工業に戻った。
「ただ、ぼくが東成社で抱えていた仕事があまりにも多く、退社までに引継ぎが終わりませんでした。古沢工業でもしばらくは、東成社の新担当と電話でやりとりしていましたね」
　そんな引継ぎのさなか、父から大目玉を食らう。
「東成社の人との電話を横で聞いていたみたいなんです。切った後、『お前何様のつもりだ』と怒られたんです」
　古澤は、仕入れ先に見積もりを出させるように電話で指示を出していた。これが父の癇にさわったのだ。お前は簡単に見積もりと言うが、受けた会社はその見積もりを作るために人手をかけ、時間もかけているんだ。それで無事発注してもらえればいいが、そうでなかったら時間もお金も無駄になってしまう。お前はそのことをわかっているのか。人のことを何と考えているんだ――。
「自分は今まで何やっていたんだろう、とハッとさせられました。それまでは粗利を稼ぎまくって、“できる人”のつもりでいた。気軽に見積もりを依頼するのが当たり前だと思っていた。でもそうじゃないということに気づかされました。世の中、お金だけじゃないんだ、みたいな考えが頭の中に浮かんできました」

「熱くなれることをやりたい」

とはいえ、大好きで、燃えに燃えた営業マンの仕事に戻れるわけではない。仕事以外で熱くなれるもの、部活動のように熱くなれることをやりたいという思いがどんどん湧いてきた。

そんな時に思い出したのが、大好きな江の島だった。2005年のことだ。ちょうど、長女が生まれる年でもあった。

「海岸や海の汚れが、気になってはいたんです。でも改めてそういう目で見ると、ぼくの大好きな江の島がゴミだらけになってる。これはキレイにしなきゃ！　という思いに駆られて、矢も楯もたまらずひとりでゴミ拾いに行ったんです。確か6月だったと思います」

絶対にキレイにする自信はあった。体力もあったから、とにかくどんどんゴミを拾った。われながら、すさまじい量を拾ったと自負していた。

「ところが1カ月後に江の島に行ってみると、全然キレイになっていないんです。それでもよしやるぞ！　とゴミを拾い始めたんですが、真夏ですよ、15分で挫折してしまいました」

とうていひとりでは無理だ。そしてこれは継続的に釣り組まなければ意味はない。

「そこで部活の仲間や後輩に声をかけ、みんなで拾うようにしました。同時に、継続していくために団体を作ることを決意しました」

こうして2005年12月。任意団体「海さくら」を設立する。名称に込めた意味合いは、冒頭に紹介した通りだ。

しばらくは、古澤とその仲間だけでゴミ拾いを続けていた。が、このゴミ拾いの「輪」を広げていかなければ、江の島の海はいつまでたってもキレイにならない。ではどうするのか。古澤にはある考えがあった。

「この年、沖縄でBEGINのコンサートを観たんです。この時彼らはこう言いました。『戦争の時、みんなは小さな声で歌っていた。今は誰もが、大きな声で歌っている。そんな時代にしてくれたおじいとおばあに感謝します』。ぼくはこれを聞いて感動しました。決して押しつけがましくなく、でもちゃんと平和の尊さを訴えている。ぼくが目指す方向はこれだ！　と思いました」

押しつけがましくないこと――これは、今も「海さくら」の活動に脈々と息づいている。

「ぼく自身、昔はタバコのポイ捨てを平気でしていましたし、それを注意されたら『ふざけんなよ』と言い返すような人間でした。そんな人たちに『エコ』とか『環境』とか言っても、絶対に聞いてくれないどころか、むしろ反発されるだろう。ならばそういう言葉を使わないで、BEGINのように押しつけがましくなく広げていきたい、と」

友人や後輩たちとビーチクリーンを続けながら、古澤はいろいろと考えた。そしてまず最初に出した結論が、“ゴミ拾いと音楽のコラボ”だった。2006年9月30日、江の島のかながわ女性センターホールで「第1回海さくらコンサート2006」を主催。同じ日に「目指せ！　日本一楽しいゴミ拾い！」を謳った第1回ゴミ拾いもスタートした。

「BEGINのコンサートの印象が強くて、音楽を通して何かを伝えることができれば、と思い、コンサートは『UMISAKURA MUSIC　FESTIVAL』と名前を変えたりしながら、2012年まで15回開催しました。でも、難しいですねえ」

一方、ゴミ拾いはこれまでほぼ毎月行ってきた。

「最初は10人集まるかどうかという人数でスタートしましたが、今では毎回100人から150人は集まってもらっています。回を重ね、この6月のゴミ拾いでちょうど140回となりました」

もちろん、これだけ続けてもゴミが江の島から消え去ることはない。海がキレイになった、という実感をなかなか持てないのが現状だ、と古澤は言う。

「だからこそどうやって関心を持ってもらうのか。実際に体験体感して現状を知ってもらいたい、そしてより多くの人を江の島に呼び寄せたい、引っ張ってきたいんです」

“熱”を伝える

古澤は、熱い。そしてその熱は、伝導する。だが熱いだけでは、熱は伝わらない。

「人を集めるとか、人に何かを伝えるというのはとても大変なことだと思います。だからぼくはあくまでもシンプルに、企画やイベントを考えては実行してきました」

「海さくら」ホームページには、これまでの活動記録がぎっしりと詰まっているが、それを見ると、先に挙げたコンサートをはじめ、企画やイベントの種類は枚挙にいとまがない。2010年には、タバコの吸い殻で作ったカヌーで川を下って江の島を目指すというドキュメンタリー映画『あなたの心が流れる先に』を企画製作し、自ら出演も果たした。監督は加山雄三の次男で俳優の山下徹大。

「江の島のゴミの7割は、実は川を流れてやってくるのですが、この事実をより多くの人に知ってもらうには、自分たちがゴミになることでした」

はっきりしているのは、いずれもとにかく“楽しさ”を追求し

ながら、それをゴミ拾いにつなげているということである。こうした柔軟なアイデアは、20代の8年間を敏腕営業マンとして疾走した古澤の経験とカンによるところが大きい、と言えるだろう。
例えば『どすこいビーチクリーン』。これはゴミ拾いのあとに、現役の力士とお相撲体験をしようという企画だ。
「砂浜で相撲をするわけですけど、その時には当然裸足になるし、投げられればそこに転がったりもする。そんな時に危険なゴミがあったらケガしてしまいますよね。だから『遊ぶために浜をキレイにしよう』と、特に土俵周りのゴミを丹念に拾うんです」
　こうしたイベントでは、誰よりも古澤が一番楽しんでいる。その様子がさらに人をひきつけ、熱を伝えていく。いや人だけではない。熱は企業や団体にも伝わっている。

　それが最も花開いているのが、2016年から始まった「ブルーサンタ」だ。赤いサンタはクリスマスにやってくる。ならば青いサンタは7月の「海の日」にやってきて、海をキレイにするんだ――日本財団との共同プロジェクトでスタートさせたこの企画、第1回は671人、そして昨年の第2回は702人のブルーサンタが江の島に集結し、ゴミを拾った。
「たくさんの人に参加してもらえたこともそうですが、うれしかったのは、江の島に住んでいる人やお店の人も、サンタの帽子やTシャツを着てもらえたことでした」
　住民ではない古澤の活動が地元に受け入れてもらえるまで10年はかかった、という。
　そして今年も7月16日、ブルーサンタが江の島にやってくる。

タツノオトシゴが戻ってくる海に

　この13年間の活動を通じて古澤が痛切に感じているのは、ゴミ拾いだけでは海はキレイにならない、ということだ。
「では何をすればいいのか。それはぼくらの手で海を創ることだ、と思いました」
　こうして2015年から始めたのが、「海創造プロジェクト」だ。古澤はこれを、ゴミ拾いと並ぶ「海さくら」の活動の両輪だと考えている。
「ぼくは最初、“かつて生息していたタツノオトシゴが戻ってくるくらいキレイな海にしたい”ということを目標に掲げました。実際タツノオトシゴがいた、ということも地元での聞き取り調査でわかりました。では何をすればいいのか。それは江の島の海底に森をつくることだ、ということになったんです」
　専門家や技術者と連携し、協力を仰いだ結果、海藻の一種であるアマモを増やすことが一番だ、という結論を得た。
「でも、ただ増やせばいいというものではありません。採取したアマモの種を育て、それを植えるのですが、江の島以外の地域のアマモを植えることに生態系上の問題はないのか。そもそも育つのか。ぼくたちは慎重に検討を重ね、時間をかけて準備しました」
　そして今年4月、人工的に育てたアマモ100株を、江の島・西浦の海底に植えた。
「いったん植えると、もうアマモの気持ちになっちゃうんですよ。ちゃんと育ってほしい。アマモちゃんにちゃんと光を届かせなくちゃって。そのためにも、『海さくら』のもうひとつの車輪であるゴミ拾いを頑張ろう、と改めて思いますね」
　古澤はこう言って、屈託のない笑顔を見せる。
　海面に躍るキラキラした光を「さくら」に見立てた古澤。今度は海中でゆらめくアマモに、夢を託している。その熱は、これからも多くの人に伝わっていく――。

海さくらホームページ：https://umisakura.com/

「湘南VISION大学開校式」を開催しました！

100名以上の受講者が江の島ヨットハウスに集まって行われた、5月5日の「湘南VISION大学」開校式。その第2部として、「湘南の海から未来を切り開く！～湘南VISION大学で実現したいこと」をテーマにパネルディスカッションが行われました。湘南ビジョン研究所理事長の片山がコーディネーターを務め、パネリストにはいずれも“海×教育”に関心を持ち活動している皆さんをお招きしました。

〔パネリスト〕

古木克明さん：Baseball Surfer／元プロ野球選手：藤沢在住
横浜ベイスターズでの9年間を中心にプロ野球選手として11年間活躍。現役の頃から（本当は禁止されていた？）サーフィンの魅力にはまり、ハワイの野球チームにいたころにメジャーリーガーから“Baseball Surfer”と呼ばれていた。

海津ゆりえさん：文教大学国際学部 教授：鎌倉在住
研究者としてのスタートは農学博士。1980年代に日本へ入ってきたエコツーリズムという概念に触れて以来フィールドワーク中心に研究活動を展開、世界中をあちこち動き回っているので研究者仲間から“回遊魚”と呼ばれている。

川田貴章さん：プロセーラー（ミキハウス所属）：藤沢在住
2020年東京オリンピックのメダリスト！（予定者）。小学3年生からセーリング競技をはじめ、高校時代には国体や全日本選手権で優勝の経験を持つ。本業である内科医を休職してセーリング競技ナクラ17級ペアで東京オリンピックにチャレンジする。

梶本和歌子さん：（ミキハウス所属）：藤沢在住
セーリング競技ロンドンオリンピック代表でナクラ17級1人乗りでは2016年世界ランキング1位という実績を持つ。2度目のオリンピックは子どもの頃からのヨット仲間である川田選手とペアで世界に挑む。

中許竜宏さん：湘南学園小学校 教諭：茅ヶ崎在住
「あい（＝I・自分）をみつけよう」というメッセージを伝えながら「感動を見逃さない」「五感を大切にする」「人との出会いを通じて生きざまを学ぶ」という3つの姿勢を大切にしているというドラマに出てきそうな熱血先生。

以下、パネルディスカッションで交わされたたくさんのご意見やアイデアの中からほんの一部をご紹介いたします。

テーマ１：「海と教育」

【海津】いったい湘南ってなんだろう？　そんなことを学びのテーマにすることができるはずです。湘南を含めて海というのは都市からみると川下、出口になります。けれど、もっと大きな視点で世界からみると日本への入口でもあります。そういう見方をしたときに地域資源としての湘南にどんな魅力があるのかを考えてみると面白いと思います。

【中許】泳ぎに行くなら海よりもプールがいい！　という子どもたちは少なくありません。潮でベタベタするしシャワーもない、黒くてこわい、ヌルヌル海草くっつく、どうやって遊んでいいかわからないなどが理由です。このことは、五感が未発達であることと関係しているような気がします。五感を育む授業ができたら海を楽しめる子どもや若い世代がもっと増えると思います。

【古木】野球もカッコいいけれど、子どもたちにとっては堅苦しいとか真面目なイメージが強くあります。一方でサーフィンやマリンスポーツにはゆるくてラフなカッコよさがあります。ビーチでやったら、同じ野球でも他とは違うカッコよさとして差別化できるはずです。そんなことを通じて自分たちが生まれ育った風土の中にカッコよさ＝魅力を見つけて、地元に誇りを持つことができると期待しています。

【梶本】楽しみ方がいっぱいある湘南で、ヨットのことを知らない多くの人に新たな楽しみの1つとして知ってほしいですね。魅力を伝えるためにも、海の楽しさだけではなくヨットを通じて学んだ海のこわさを伝えていくことも大事だと思っています。

【川田】私も海のこわさを知ってもらうことはとても大切なことだと感じています。自分の力ではコントロールできない自然とのつき合いかたを学ぶのに海はとてもよい教材になると思います。

片山清宏
NPO法人湘南ビジョン研究所 理事長

テーマ2:「授業企画者になったら」
【中許】親子いっしょに海岸で砂の造形にとりくむ授業があったらいいと思います。これは親が夢中になって造形にとりくんでもらうのがミソです。子どもたちは普段、大人が疲れている姿を見ています。子どもたちがうれしいのは親が楽しんでいる顔を見ることです。自分の親が子どものように夢中になってとりくんでいて、そんな親を自分が手伝うことができる授業です。
【川田】これから2年間、セーリング競技が東京オリンピックのプレ大会として江ノ島でたくさん開催されます。本番のオリンピックは規制が厳しくなるので、実はプレ大会のほうが間近で競技の魅力に触れるチャンスなんです。ハーバーで眠っているクルーザーなどを観覧船として出してもらって、解説付きで船上観戦する授業があれば楽しいと思います。
【古木】「ビーチベースボール」という、世界のどこにもないスポーツをみんなで考える授業をやってみたいですね。新しいルールを自分たちでゼロからつくっていくなんて滅多にない経験ですし、なぜルールを守らなければならないかという社会生活の基本にも通じる意味ある授業になると思います。
【海津】以前、湘南を山から海へ向かって歩きながら、どこで誰がどんな遊びをしているか、どんな仕事をしているかを数えたことがあります。その時はおよそ遊びが20種で仕事が50種でした。街を歩きながら湘南にある「自然」「人がつくってきたもの」に目を向けて掘り起こす、地域の宝を探す授業はきっと楽しいですよ。探し出したお宝が人だったら、その方を名人、師匠として招いて話を聴くことは大きな学びになると思います。

このほか、フロアの皆さんにも席のお隣同士で授業のアイデアを自由にお話していただき、その中のいくつかを会場全体で共有していただきました。
☆由比ヶ浜にサクラ貝を復活させるプロジェクト
☆漁師さんやお魚屋さんに魚のさばき方を教えてもらう
☆湘南ー海ー働く、職住近接のライフスタイルを考える
☆モノとココロ　人が豊かになる「バランス＝こういう按配」を考える
☆海と健康　砂を踏んで浄化パワーを高める
☆漁業権などをクリアして子どもたちが潮干狩りの獲物を持ち帰れるイベント

最後にパネリストの皆さんからコメントを頂戴して、第2部も盛会のうちに幕を閉じました。
【古木】ほかにはない湘南の魅力を伝える役割を湘南VISION大学といっしょに担っていきたい。
【海津】湘南にも光があれば影もある。目をそむけずに「学びたい」という気持ちからはじまった湘南VISION大学が地域の街づくり、人づくりを担っていただきたい。
【川田】セーリングについては普及活動がままならない状況です。「UNIVERSITY　NETWORK」をかかげる開かれた大学として、専門家、地元、インフラなどをつなぐ役割に期待しています。
【梶本】私は食いしん坊なのですが自分ではできないので、お魚のさばき方の授業ができたら本当に参加します。今日は第1部の海ゴミのことなども含めてとても勉強になりました。
【中許】今日はあらためて「変わらないために、変わり続ける」ことの大切さ、難しさを考える機会になった。根底にある大切なものを守り続けるために、私たちが成長していく（カッコいい大人でいる）ことを実現する場としての湘南VISION大学に期待しています。
パネラーの皆さん、フロアで参加してくださった皆さん、熱心な議論と楽しいたくさんのアイデア、本当にありがとうございます！
（文・中村 容）

古木克明さん
Baseball Surfer/元プロ野球選手

海津ゆりえさん
文教大学国際学部 教授

川田貴章さん
プロセーラー（ミキハウス所属）
梶本和歌子さん（ミキハウス所属）

中許竜宏さん
湘南学園小学校 教諭

Information

let's have fun!
配布・設置していただける場所を募集しています

誰でも参加できる"海の学び場"『湘南VISION大学』授業第3弾

BEACH YOGA Day 2018
～海で心もカラダもキレイになろう!～

07.21
Sat

YUIGAHAMA BEACH YOGA DAY 2018」を開催します!
由比ガ浜海水浴場がアジア初の国際的な環境認証制度「BLUE FLAG」を取得して今年で3周年!参加者全員でビーチクリーンをし、海の環境問題と「BLUE FLAG」の取組みについて学びます。そのあとは、『studio yoggy』の人気講師にお越しいただき、みんなで海への感謝の気持ちを持ってサンセットビーチヨガを楽しみたいと思います。 協賛各社から参加者へのプレゼントも盛りだくさん!定員100名。事前申し込みは必要ありません。湘南の夏を満喫したい方、ぜひお気軽にご参加下さい!

日時：2018年7月21日(土) 17:00～19:00(受付開始16:30)
場所：由比ガ浜海水浴場HEAD OFFICE前
ねらい：海の環境認証制度「BLUE FLAG」と由比ガ浜の魅力を多くの人に知ってもらう。
主催：湘南VISION大学(授業担当者:イリエ)
共催：由比ガ浜海水浴場　　**協賛**：studio yoggy、ROOTOTEほか
協力：由比ガ浜茶亭組合、滑川海浜組合、由比ガ浜ボート組合
後援：(予定)鎌倉市、鎌倉市教育委員会、鎌倉市観光協会、鎌倉市商工会議所、tvk、FMヨコハマ、神奈川新聞社、公益財団法人かながわ海岸美化財団
対象者：どなたでも参加可能　　**参加費用**：1,000円(保険代含む)
その他：ヨガマットの貸し出しはしておりません。

誰でも参加できる"海の学び場"『湘南VISION大学』授業第4弾

ビーチコーミングでタイムスリップ ～古都「鎌倉」の歴史に触れよう!～

07.28
Sat

「ビーチコーミングでタイムトリップ～古都『鎌倉』の歴史に触れよう!～」を開催します!!
ビーチコーミングはイギリスで始まった海辺の遊びで、「砂浜をクシで優しくすくうように物を探す」という意味です。
由比ガ浜では、鎌倉時代の陶磁器や、馬の歯のかけらなど、発見の可能性があります。波打ち際で、海からのフレッシュエアをたくさん吸い込んで、海が好きになる1歩をビーチコーミングで始めましょう♪

日時：2018年7月28日(土) 10時～11時30分 ※9時50分受付開始
場所：ローソン 鎌倉坂ノ下店前の海岸 (江ノ電長谷駅から徒歩6分)
ねらい：海波打ち際で、海を楽しむ　　**主催**：湘南VISION大学(授業担当者:ニシオ)
講師：山田海人氏 海洋研究開発機構OB / NPO法人チームくじら号理事 / 鎌倉いきもの会議 代表
著書：「ビーチコーミングをはじめよう 海辺で楽しむ宝探し」
対象者：小学4年生以上、どなたでも参加可能。海が好きな方、鎌倉が好きな方、歴史が好きな方、貝が好きな方、夏休みの自由研究のテーマを探している方
※小学3年生以下のお子様は保護者同伴
参加費用：1人500円(小学校3年生以下無料)
持ち物：お宝を入れるビニール袋、タオル
その他：海岸での活動です。熱中症対策のお水、帽子など必要に応じてご持参ください
お子様はビーチサンダルよりクロックスなど、かかとのあるタイプのサンダルをお勧めします。

申し込み・お問い合わせ：Facebookイベントページの参加ボタンを押すか、info@shonan-vision.orgまでご連絡ください。
延期又は中止の場合は、Facebookイベントページ上又は湘南ビジョン研究所HPでご連絡します。
FB：https://www.facebook.com/shonanvision/　　HP：http://shonan-vision.org/

SHONAN VISION
Social Magazine
Vol.10
2018.06

PUBLISHER：片山清宏
EDITOR IN CHIEF：森休八郎
ART DIRECTOR：大戸千尋
EDITORIAL STAFF：中村 容　イリエケンジ
ニシオエイコ
COVER PHOTO：上重泰秀

web http://shonan-vision.org/
@shonanvision
info@shonan-vision.org